も細長くなる。またあまり浅過ぎると，青球ができて商品価値を失うので注意する。

施　肥

らっきょうは瘠地でもできるが，収量をあげるためには，かなりの施肥が必要で，現地での施肥基準は別表のとおりである。

らっきょうの施肥基準（アール当り）

肥料名	1年目		2年目			成分
	元肥	9月下旬	3月上旬	9月上旬	3月上旬	
マグポロン	kg	kg	kg 100	kg	kg	kg N44.8 P28.0 K39.2
燐硝安加里 S604号	60	40	60	60	60	

病害虫防除

・根ダニ　病虫害で最大のものは根ダニである。種球をジメートエート乳剤の2,000倍液に10分間浸積して消毒する。また圃場での防除は，ジメートエートやダイシストンの粒剤を施用する。施用の時期は融雪直後の3月下旬から4月上旬に，10アール当たり6kg施用して中耕を行う。

・白色疫病　融雪後の3～4月頃らっきょう畑がところどころ腐敗する病害である。防除法は，早植する（8月下旬），石灰の多用を避ける。11月中にダイホルタン水和剤を10アール当たり700g，約20kgの砂に混合して圃場全面に散布する。

除草剤の利用

1戸当たりの栽培面積が大きく，除草には多くの労力を要するため，除草剤を利用する。

除草剤は，秋はクロロIPC（10アール当たり300g），春～夏は，ダクタール（10アール当たり2kg）を約20kgの砂に混ぜて散布している。また多少薬害が出る（葉に白い斑点）こともあるが，水田用のニップ粒剤を用いている農家もある。

収穫および調製

6月下旬頃から収穫をはじめ，8月上旬頃までに終る。掘取りは1株毎に鍬で掘り起こし，根および葉を鎌で切り離したものを篩にかけて砂を落し，カマスにつめる。収穫したものは部落の集荷所に運んで秤量，受渡しを行い，あとは農協が処理するが，切作業，水洗い，銘柄別選別，塩漬が第一次加工の工程である。

収　益

10アール当たり収量は3～4tで，農家の手取価格はkg当たり100円，粗収益は2カ年間で30万～40万円程度である。

「鹿島ピーマン」の栽培と改善を要する点

茨城県鹿島地帯特産指導所
木　内　　香

はじめに

鹿島ピーマンは鹿島郡南部の温暖な砂土地帯に栽培され，その歴史は10年余を経過している。48年の面積は212haに及び，東京市場の入荷量27,724tの52%を茨城ピーマンで占め，その中でも鹿島地方が90%を出荷し，名実ともに全国的なピーマンの主産地を形成している。

作　型

半促成，促成，早熟，抑制の4つのタイプで栽培されているが，耕種概要は下記の通りである。

作型は半促成が主体で，1戸平均25a栽培し，連作が多く，ナス科粒物であるが，その障害や，土壌病害発生も少なく安定した経営となっている。

促成栽培の普及は遅々としているが，所得率が低く，特に作今燃料費の高騰が更にブレーキをかけ，或は減少の傾向を辿るであろう。

抑制は西瓜の跡地，または半促成ピーマンを6月で収穫を打切り抜取って，更にピーマンを定植し，8月以降に品質の優秀なものを生産することがねらいで，今後抑制トマトからの転換が増大するであろう。

定植準備

土壌病虫害に関連する立枯性エキ病，菌核病，タバコガの幼虫の防除にはクロールピクリン，また虫の密度も高いので，DD，EDBを使用している。

施　肥

施肥上注意すべき点は，砂土のために地力がない，流亡が甚しい，生育期間が長い等を考慮し，

堆厩肥の不足から，切ワラを施用し，トレンチャーで深さ40～50cmに攪拌し，通気をはかるとともに，地力培養につとめるよう指導している。

半促成ピーマン標準施肥量（kg/10a）

肥料名	元肥	追肥	備考
堆肥	2,000	生育状況を見て灌水時液肥または液肥源を使用する。 1回の施肥量 液肥　24 液肥源　10	切ワラのときは1,000kg，この場合エスコンを50～60kg入れる。 元肥三要素成分 N52－P60－K52
ケイフン	100		
油カス	150		
CDU化成	160～200		
高度化成777号	60		
石灰チッソ	40		
苦土重焼りん	60		
マグポロン	60		

元肥の施用量は60％～70％で，残りは液肥を主に追肥している。

肥料のうち，特に油粕類の使用が多かったが，近年緩効性の肥効が認識され，その後油粕類の施用量は少なくなって来ている。

ピーマンの作型

早熟	抑制	促成	半促成	栽培型
1上～1中	5下～6中	7下～8上	11月旬下～12上	播種期
4上～4中	7上～7中	9上～9中	2月旬下～3上	定植期
5上～11上	8上～12上	9下～6中	3月旬上～12上	収穫期間
エース	土佐グリーン	新さきがけみどり、土佐グリーン	エース土佐グリーン	品種
6	13	8	185ha	栽培面積
トンネル栽培	パイプハウス利用西瓜跡地に栽培	加温大型ハウス利用	パイプハウス利用2～3重保温	備考

ベットの高さは10～15cmが多いが，普及所の試験展示ほの成績結果によると30cm盛上げ，切ワラを混合した区が良好であったので，次第に転換しつつある。

定植

定植は播種後90日前後の，一番花が開花時点を目安にしている。

灌水はビニールパイプを利用し，2～3日間隔で行っている。

切返し剪定は，7～8月にかけて市場価格も安くなるので，9月以降多収と品質改善を考慮し，主枝を10節前後で切りもとしをしている。

代表的病虫害としては，灰色カビ病，ウドンコ病，ハダニ，タバコガ，アブラ虫等である。

収穫は1個当り35g内外を基準にし，出荷する際には，ポリ袋に150g入れ，更にダンボールに40袋つめ，6K入で京浜市場に販売している。

おわりに〈改善すべき点〉

床土が材料，労力不足から，促成的なものが多く，良苗生産の観点から農協を中心とした共同育苗を展開し，所得の平準化が急務である。

鉢上げする鉢は，最低15cmを使用し，また上げてから17日前後で定植し，老化の防止と活着促進をはかりたい。

定植時期を3月10日前後に統一し，落花，石ピーマンを防止したい。

ナス科植物の連作体系が多いが，西瓜等との輪作を考え，今後予想される障害を回避したい。

ダニ類の防除には，同一薬剤を連用すると，抵抗力がついて効果がうすいので，有機塩素剤，有機硫黄剤，有機燐剤の交互使用と，散布水量を多くすることが大切である。

切ワラは最低1カ月前に施用し，充分灌水して，腐熟させることが大切である。

有機物の不足から，地力の消耗が甚しいので，養豚家と提携して生豚糞を施用して，一石二鳥の効果をはかりたい。

普及所の調査によると，pH7.0以上を示す土壌が存在しているので，生育，収量の関係を追求することが課題である。

小グループの組織が現存しているので，町単位の出荷組織に加入促進をはかり，最終的には，南部3町を一丸とした連合体を結成し，産地銘柄を確立し，系統共販体制の整備が緊要である。

以上，鹿島ピーマンの栽培の現状と，改善を要する問題点についてその概要を述べた。拙文充分に意をつくさぬと思われるが，関係各位のご参考になれば幸いである。